

統一テーマ「ロマンス諸語における語彙論」

藤田 健（とりまとめ）

1 はじめに

日本ロマンス語学会第55回大会の統一テーマは、「ロマンス諸語における語彙論」であった。この枠内で渡邊淳也、楊鶴、古賀健太郎、川口裕司、山本真司（敬称略、以下同様）による5発表（持ち時間20分）が行われた。渡邊はフランス語における語彙の特性、楊はフランス語における罵倒語、古賀はフランス語における語尾音消失と擬似接頭辞化、川口はフランス語における *sel* の語形変化、山本はフリウリ語における「カエル」を表わす語彙についてそれぞれ論じた。このうち渡邊、楊、古賀、山本の発表は論文として本号に掲載されている。

2 総合討議と質疑応答

以下に総合討議のもととなる研究発表の要旨と、それをめぐって行われた討議の概略を記す。

(1) 渡邊淳也「フランス語の語彙の操作性とアフォーダンス」

フランス語では、17世紀の純化主義(*purisme*)のもと語彙が大幅に減少し、現代でも少数の基礎語彙をくり返し使うことをいとわず、誰にでもわかりやすい「明晰さ(*clarté*)」を志向するという特徴をもつ。この代償として、ひとつの語の守備範囲がひろくなり、多義語が多い。特に名詞は多義的で、その多義性の根底には実体への指示よりもその機能的な特徴づけを示す傾向があり、フランス語には名詞と形容詞を兼務する語彙が多い事実とも符合する。発表では、Cadiot et Nemo(1997)の名詞が標示するものは「外在的特性(*propriété extrinsèque*)」、すなわち主体と対象との関係であるとの主張に基づき、この関係に対してGibson(1979)の生態的心理学において提唱された「アフォーダンス(*affordance*)」の概念を適用することによって語彙の分析を行った。アフォーダンスとは、環境が動物に「提供する(*afford*)」ものとして定義されるが、動物と環境とのあいだの相補性(*complementarity*)と形容される関係から出てくるものである。具体的には、名詞 *créneau*、*coupe-papier* 等の動詞由来複合名詞、*dynamique* 等の名詞と形容詞を兼任する語彙、*sourd*、*aveugle*、*bête*

等の形容詞についての分析を提示した。これにより、フランス語の各語彙の使用可能な範囲がアフォーダンスによって確定されることが多いことが確認され、意味記述にアフォーダンスを適用することによりフランス語の語彙の特性がよりよく理解できると主張した。

総合討議では、アフォーダンスという概念を用いることでどこまで語彙特性を明らかにできるのか、認知言語学における多義性の分析と接点があるのかなどの質問や、フランス語とスペイン語との語彙の意味に関する違いについてのコメントが出された。

(2) 楊鶴「フランス語の罵倒語に関する考察」

相手を侮辱し、相手に恥をかかせ貶める行為で用いられる罵倒語の研究では、対人関係と文脈情報を踏まえなければならない。Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論を適用すると、話者は命令や禁止のような緊急場面、相手より上位の立場にある場合、または相手の面子をつぶしてもかまわないと思うような場面において罵倒語を選択することになる。罵倒語は一般的には「下品な言葉」と認識されているが、動物、人物、身体の一部を表す語彙や比喩を伴ったものも見受けられる。発表では、あらゆる暴力場面において使用される罵倒語を記述することで、話者がどのように相手を貶めるのか、また異なる場面で罵倒語のもたらす意味効果がどのようなものであるかを論じた。具体的には、「Casse!」、*« Bouge ! »*等の命令場面に見られるもの、「Ferme ta gueule!」、*« Tais-toi ! »*のような禁止場面に見られるもの、putain, tête de con等の相手に悪口・侮辱を与える場面で見られるものという3つの場面に分けて観察し、罵倒語が「ことばによる暴力攻撃」と対事罵倒・対人罵倒からなる「ののしり」という2つのタイプから構成されると分析した。

総合討議では、語そのものに罵倒の意味があるわけではないのではないかという質問が出された。

(3) 古賀健太郎「フランス語における語尾音消失と疑似接頭辞化」

フランス語では語尾音消失(apocope)がよく観察されるが、その中には拘束形態素の体を成し主要部に前置されるケースも見られ、こうした疑似接辞的な要素は affixoid などと呼ばれる。その意味内容は元となる語彙素のそれとは必ずしも一致しないことが Booij(2010)で報告されているが、同様の意味変化は単純な語尾音消失でも一部観察される。さらには、疑似接頭辞として現れる場合と形態的に独立した形の場合とで意味内容が異なることもある。発表では、語尾音消失形がそのような形態・統語的環境下に分布し、どのような意味内容を呈しているかについて、TLFi(Trésor de la linguistique française informatique)をコーパスとし、そこから得られたデータをもとに分析した。具体的には、auto等の新古典

的複合から擬似接頭辞化したもの、bio 等の新古典的複合でありながら擬似接頭辞化していないもの、vélo 等の元の接辞とは異なる形で擬似接頭辞化したもの、lino のように擬似接頭辞のみならず語尾音消失形も多義化したものに分けて提示し、元の形式の形態的境界に沿った語尾音省略は擬似接頭辞化する可能性があること、語尾音省略の時点で意味内容が特化されるケースが多いことを示した。

総合討議では、auto は語尾音消失ではなく短縮ではないか、dico-はどう扱われるかなどの質問や、TLFi だけでなく話し言葉のコーパスも必要ではないかというコメントが出された。

(4) 川口裕司「フランス語 SEL「塩」の語形変化 一言語地理学的再考一」

Gilliéron et Mongin(1907)が対象とした sel という語は、ロマンス諸語において文法性の点から興味深い語彙と言える。発表では、まず上記による、北仏 l sèl 男性名詞と南仏 là saũ 女性名詞というペア解釈は誤りである、sé 形が古形で sèl 形が中心から伝播した、等の分析、並びに Brun-Trigaud et al.(2005)による、ある地理的線より南では女性名詞であること、-l が母音化して sal>sau となったという sel の分析を紹介した。これらを踏まえつつ、フランス言語地図(ALF)1213 番 piler le sel について、grandes gabelles の徴収地域と le sel 形地域が一致しているという言語外要因が見られる、-l は再建形ではなく、社会階層・レジスターによる変異であり、子音の前と母音の前では音声環境による変異が起きたという総括的な解釈を主張した。さらに、ALF から約半世紀後の言語状況について、ブルゴーニュ言語民族誌地図 1494 番 du sel と中央山塊言語民族誌地図 1139 番(du) gros sel の 2 つの地域別言語地図を分析し、前者では標準形 sel 形が東部に伝播している点、後者では北部オック語に sau, saũ という形が見られる点等の ALF との相違点を指摘した。最後に Gilliéron, Dauzat らによる言語地理学の理論と方法の本分析への適用性について、時間的連続性と地理的連続性の考え方が有効である、同音衝突の説明は post hoc 的である、言語地理学と文献学のバランスが重要であるなどの点を主張した。

総合討議では、50 年間で違いが現われているが、レジスター・社会的文脈についてどう考えるかという質問が出された。

(5) 山本真司「「カエル」とは何か：フリウリ地方の例より」

言語研究は生物界の多様な現実を分類・命名する営みに加わり、古くからの広い意味での辞書的・語彙記述的な作業や近代の地理言語学や方言学が、言語外現実と命名との対応を定めることを探求する膨大な作業を行ってきた。その中から、ある言語がある特定の分

野において詳細な命名・分類を行っているのはどういうことを意味するのかという問いも生まれた。発表では、フリウリ語において「カエル」を示す様々な単語を例に命名・分類の例を論じた。具体的には、フリウリ語の辞書 NP「新ピローナ」にあげられている *crot*, *pissargot*, *craçule*, *muc*, *'save*, *campanel* 等 31 語を対象とし、まず類語・同義語関係によって 4 つのカテゴリーに分類した。次に学名・イタリア語名・日本語名との対照を行った上で、それぞれのカテゴリーの NP による説明を紹介した。さらに、名称の多様性の理由として、方言的な相違とさまざまなカエルの呼び分けを指摘した上で、フリウリ語には総称「カエル」にあたる語が存在しないことを示した。最後に学名と通称の違いについて、通称はその言語文化圏における文化的・社会的位置づけを示しており、プロトタイプ論的に定められ、比較的安定しているが 80 年代以降大きく変化したと主張した。

総合討議では、縮小形について生産的派生形として一律に扱えるのか、地域差はないのか、どこまでが民衆語とみなせるのかなどの質問や、「カエル」と「ヒキガエル」の区別はフリウリ語のみならず、スペイン語や英語にも見られるものでヨーロッパでは別物として捉えられているのではないかというコメントが出された。

3. まとめ

今回の統一テーマは、語彙という言語研究において極めて広範囲に及ぶ問題が取り上げられ、理論的な語彙分析、語用論、形態論、歴史言語学、言語地理学、方言学、辞書編纂学等、実に多岐にわたる言語現象に関する分析が報告された。多くの出席者が高い関心を寄せ、総合討議においては活発な議論が展開された。特に今回は、広義で文法と呼ばれる言語学の中心的分野にとどまらず、隣接領域との接点に位置づけられる諸問題が対象となり、言語研究の射程の広さが改めて実感されたところである。語彙研究は今後あらゆる方向でさらなる発展が見込まれ、興味深い研究が様々な形で数多く展開されることが予想されるような発表・討議であったと言えよう。